

# 設楽町津具の大根平遺跡・ 鞍船遺跡について

川添和暁

設楽町津具の大根平遺跡と鞍船遺跡について、調査記録などから、調査の経過と遺跡の様相について検討した。県内の縄文時代遺跡としては、文化財保護法に基づく初期の頃の発掘調査であるが、今日的に見ても興味深い考古学的成果が出されており、貴重な調査事例として紹介するものである。

## 1. はじめに

本稿は、設楽町津具に所在する、大根平遺跡と鞍船遺跡に関する発掘調査経過について、検証をしたものである。後述するように、両遺跡は太平洋戦争後の早い時期に、愛知県内で発掘調査が実施され、注目される成果が見つかった。しかし、現在に至るまで、発掘調査報告書の刊行がなされておらず、出土資料に対する一貫した整理調査も実施されていない。そのことから、遺跡名はよく知られていながらも、その実態が不明な状況となっている。

筆者は、機会があって、令和3年5月に開館した、新しい奥三河郷土館の考古展示に関わることができ、その際に、町内に残されている両遺跡の調査記録について触れることができた。ここでは、遺跡の調査の経緯を中心に、両遺跡の様相をまとめてみることにした。

## 2. 旧津具町内の遺跡分布について

大根平遺跡および鞍船遺跡の所在する、設楽町津具地区は、平成17(2005)年10月、平成の大合併により設楽町に編入される前までは、北設楽郡津具村として一自治体を成していた(図1)。津具村自体も、以前の上津具村と下津具村が、昭和31(1956)年10月1日に両村が合併して成立した。後述する発掘調査当時は、大根平遺跡は下津具村に、鞍船遺跡は上津具村に属していた。津具地区は東西9km・南北8kmほどで、北を長野県根羽村と接しているほか、北東から時計回りに、豊根村・東栄

町・旧設楽町・旧稲武町(現豊田市)と接している。区域中央には津具盆地があり、中心には津具川が流れている。津具川は東流し、豊根村

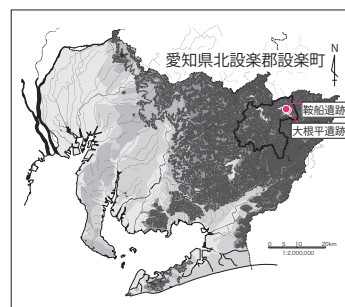
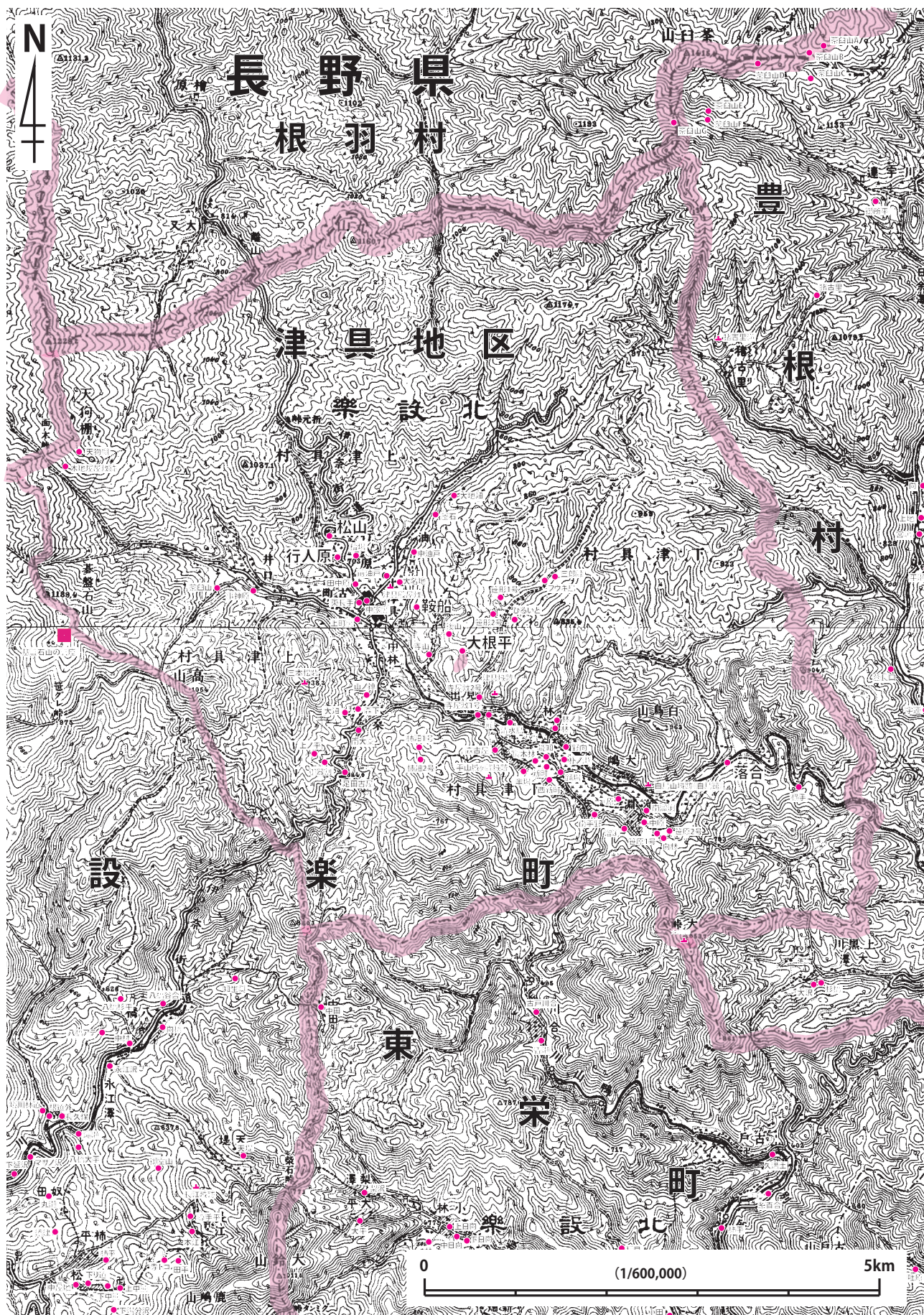


図1 大根平遺跡・鞍船遺跡の位置

で大入川となり、浜松市天竜区佐久間町付近で大千瀬川と合流後、さらに天竜川へと流れていく。字向洞周辺が豊川水系の境川の分水嶺である上、古町高山や碁盤石山などを境として、矢作川水系の名倉川に流れ込む沢筋がいくつもあり、まさに大きな水系が集まる場所となっている。津具川流域の豊根村に接する字向落瀬付近で標高600mほどと最も低く、津具盆地の中央は標高700mほど、古町高山1,054m、碁盤石山1,189m、天狗棚は標高1,240m、北東端の茶白山・萩太郎山の山頂付近は、標高1,400mに近い。

このように、津具地区は、中央の津具盆地周辺に沖積低地や低位の丘陵が展開し、それを囲む周囲には比高差300mを越える山岳部、さらには北東側には高原景観が広がるなど、興味深い地勢となっている。現在、津具地区内で登録されている遺跡数は65遺跡で、津具川流域あるいは津具川に流れ込む支流沿いの丘陵地上に立地している。多くは縄文時代(条痕文期を含む)、あるいは平安時代以降の遺跡とされている。区域内で縄文時代の遺跡として著名な遺跡には、本稿で紹介する大根平遺跡、鞍船遺跡のほか、松山遺跡、行人原遺跡や落合遺跡など







がある。松山遺跡と行人原遺跡は津具盆地北東端の丘陵部に立地し、落合遺跡は津具盆地西端の白鳥山南東側の丘陵裾部に立地する。鞍船遺跡および大根平遺跡は、萩太郎山から伸びる盆地中央付近の丘陵端部に立地する。このように、縄文時代遺跡は津具盆地周辺に広く点在していたといえよう。この中で、本格的な発掘調査が実施されたのは、大根平遺跡と鞍船遺跡のみである。

以下、大根平遺跡と鞍船遺跡について、それぞれ概観をしていくこととする。

3. 大根平遺跡

遺跡の発見・調査の経過に関しては、『北設楽郡史』（岡田・沢田・鈴木・村松・夏目 1967）と『津具村誌 I 資料編』（村松ほか 1997）に詳しく、特に後者は、調査後に夏目一平から愛知県へ提出された「埋蔵文化財試掘経過に関する報告書」の内容が転載されている（以下「大根平試掘経過報告書」とする）。また、現在、設楽町には夏目一平が保管していた「大根平遺跡発掘日誌」（以下、「大根平調査日誌」）や焼き付け写真がわずかに残されている。これらの文献・書類を紐解いていくと、調査の様子をおぼろげながら窺うことができる。

大根平遺跡は津具字中口の、標高 750m ほどの丘陵上部の緩斜面上に立地する。遺跡所在地は、津具川北側から南側に張り出す丘陵北側（奥側）に当たる。このため、昭和 26（1951）年に村松信三郎によって発見されるまでは、周知の遺跡ではなかったという。発見時にはすでに縄文土器・弥生土器・陶器片が採集されており、複合遺跡としての注意が払われていた。

遺跡の立地する丘陵は、幅約 20m・長さ 60m ほどの舌状の高まり地形が南東方向の低地部分に向かって伸びている。低地部分は湿地であり、発見・調査時、舌状の高まりの両脇には、湧水点や池が存在していた。

昭和 27（1952）年 7 月から久永春男が担当者となり発掘調査が行われた。「大根平試掘経過報告書」によると、これは文化財保護委員会の指示によるものという。恐らく、主任の調査員には日本考古学協会員を据える旨の指示があ

表 1 大根平遺跡 調査内容と参加者一覧

氏名 年月日	夏目一平	久永春男	松島透	田辺昭三	岡田松三郎	村松信三郎	鈴木富美夫	芳賀陽	金田守一	伊藤正松
昭和 27 年 7 月 20 日 (日)	責任者	調査主任	第 2 T	第 1 T	第 6 T	第 3 T・第 4 T	第 1 T		第 5 T	
昭和 27 年 7 月 21 日 (月)	責任者	調査主任	第 2 T	病気 宿で静養	第 6 T	第 6 T	第 1 T	+		
昭和 27 年 7 月 22 日 (火)	責任者	調査主任	第 2 T	第 1 T	第 8 T・第 9 T	第 9 T	第 1 T	第 7 T・第 10 T		
昭和 27 年 7 月 23 日 (水)	責任者	調査主任	第 2 T	第 1 T	写真	測量	測量・第 1 T	写真・第 2 T・第 7 T		第 1 T・第 2 T
昭和 27 年 7 月 24 日 (木)	責任者	調査主任	第 2 T	第 1 T		測量	第 1 T			
昭和 27 年 7 月 25 日 (金)	責任者	調査主任	第 2 T	第 1 T		測量 (遺跡全体地形図)				
昭和 27 年 7 月 26 日 (土)	責任者	調査主任	測量 (遺跡全体地形図)	第 1 T・測量 (遺跡全体地形図)		測量 (遺跡全体地形図)				
昭和 27 年 7 月 27 日 (日)	撤収作業	撤収作業				撤収作業				

り、考古学協会設立初期から会員の久永が依頼されたものと推察される。「大根平調査日誌」によると、主要なメンバーに以下の名前が挙がっているほか、下津具町史編纂委員、津具中学校職員ならびに生徒が多数参加していた。

夏目一平【責任者・遺物管理】  
久永春男【調査主任指導・写真】  
村松信三郎【測量】  
松島透・田辺昭三・岡田松三郎・  
鈴木富美夫・芳賀陽

当時、松島透は明治大学学生、田辺昭三は立命館大学学生であった。後に、松島(神村)は、田辺と一緒に大根平遺跡の発掘調査に参加したことを、回想している(神村 2013)。

各人の調査経過を上表 1 で示す。これは

本格的な掘削調査に入ってから工程であり、事前に調査区（トレンチ）設定のためのボーリングステッキによる調査が実施された。表中で明らかなように、第1トレンチ（表中ではトレンチをTで表記、以下同じ）と第2トレンチに調査の主体が注がれていることが分かる（表1 赤部分）。両トレンチとも縄文時代の竪穴建物跡が良好な状態で確認されたことによる。関係書類を照らし合わせると、第3～第6・第8トレンチの位置に齟齬が生じている。本稿では、最も詳細な「大根平調査日誌」を基本にして、「北設楽郡史」で位置を特定した。これをもとに、調査の内容について見ていくことにする。

調査区は、舌状に伸びる高まり地形の根元付近から北側丘陵稜線に向かってA区・B区・C区・D区と呼称されている（図3）。舌状地形の根元中央がA区、A区に隣接した南西側の丘陵端部がB区、A区に隣接した北西側丘陵上部がC区、A区より40mほど北東側の丘陵上端部がD区である。この地区呼称は、第1～第10トレンチの掘削調査の結果、遺構・遺物の良好な地点に付されたものである。

**A区** 第1トレンチによって、1号住居址（図4）が確認された。NW-ESの土層断面ラインは、当初の第1トレンチの東壁であったと思われる、土層断面の記録後、竪穴全体を出すために東側に拡張された模様である。褐色土層（上層）からは水神平式土器が多数発見され、褐色土層（下層）が1号住居址の埋土で、上層が弥生時代前期、下層が縄文時代中期の包含層と考えられる。

1号住居址は長軸4.1m・短軸4m・壁の深さが最大30cm確認された。平面プランは円形で、床面東側から南側に向かって、ベッド状の高まりが確認されたとある。炉跡は長軸70cm・短軸60cmの五角形もしくは円形を呈する石囲炉跡で、20～30cm程度の板石を10ヶほど巡らしている。炉跡構築の際の掘り込みの土坑は不明である。炉跡はやや北側に寄って構築されていることから、入り口は南側であったことが推定される。対角線上に径40cmほどの柱穴が存在していることから、4本程度の支柱穴構造を呈していたと推定される。調査時に

ベット状とした高まりは、掘り方での機能面後に部分的に更新された床面であった可能性も考えられ、ベット状の高まりの下からピットが検出されているようである。時期は、縄文中期前半とされる。

**B区** 第2トレンチによって、2号ピットおよび2号住居址が確認された区である（図5）。表土と褐色土層（上層）との境で、水神平式土器を多量に出土した。褐色土層（下層）では、中期前半と中期後半の二者が出土したという。さらに調査を進めると、底面掘り鉢状を呈する大きな落ち込みが検出されたとのことで、2号ピットと名付けられた。方形状のプランで、長軸4.0m・短軸3.8m、壁の深さが最大30cm確認された。北東側が斜面上方側であり、この部分の掘り方が良好に残存していた。柱穴の検出は難しかったようであるが、長軸100cm・短軸90cmの平面隅丸方形を呈する地床炉跡が検出された。その後の断ち割りにより（写真4）、さらに下に遺構があることが判明し、検出されたのが2号住居址である。4.8m四方の隅丸方形プランを呈するもので、壁の深さは北東側で最大60cm確認された。四本の支柱穴構造を呈するもので、北側壁には溝状の落ち込みが検出された。中央やや西よりには径80cmの地床炉跡が検出された。また、入り口と想定される南西側には炭化物の集中する範囲が検出され、「大根平試掘経過報告書」では敷居状と表現されている。2号住居址自体は中期後半に属するものである。しかし、遺構南東部の床面に近い遺構埋土の黄褐色土層には、楕円押型文が多く見つかったという。調査の所見では、付近にあった早期前半の包含層が、遺構埋没過程で流入した可能性を指摘している。この黄褐色土層が、1号住居址の褐色土層（下層）と同一のものであるかは分からないが、もし別時期の堆積であるならば、さらに下に早期前半の遺構が存在していた可能性も考えられる。

**C区** 第6トレンチによって、弥生土器などの出土が確認されたところである。表土の下、黒色層（約30cm）・褐色土層（50～60cm）・赤土層の層序が確認され、弥生土器は、黒色土上面から約20～30cmのレベルでまとまって出土したという。縄文土器は表土から60～



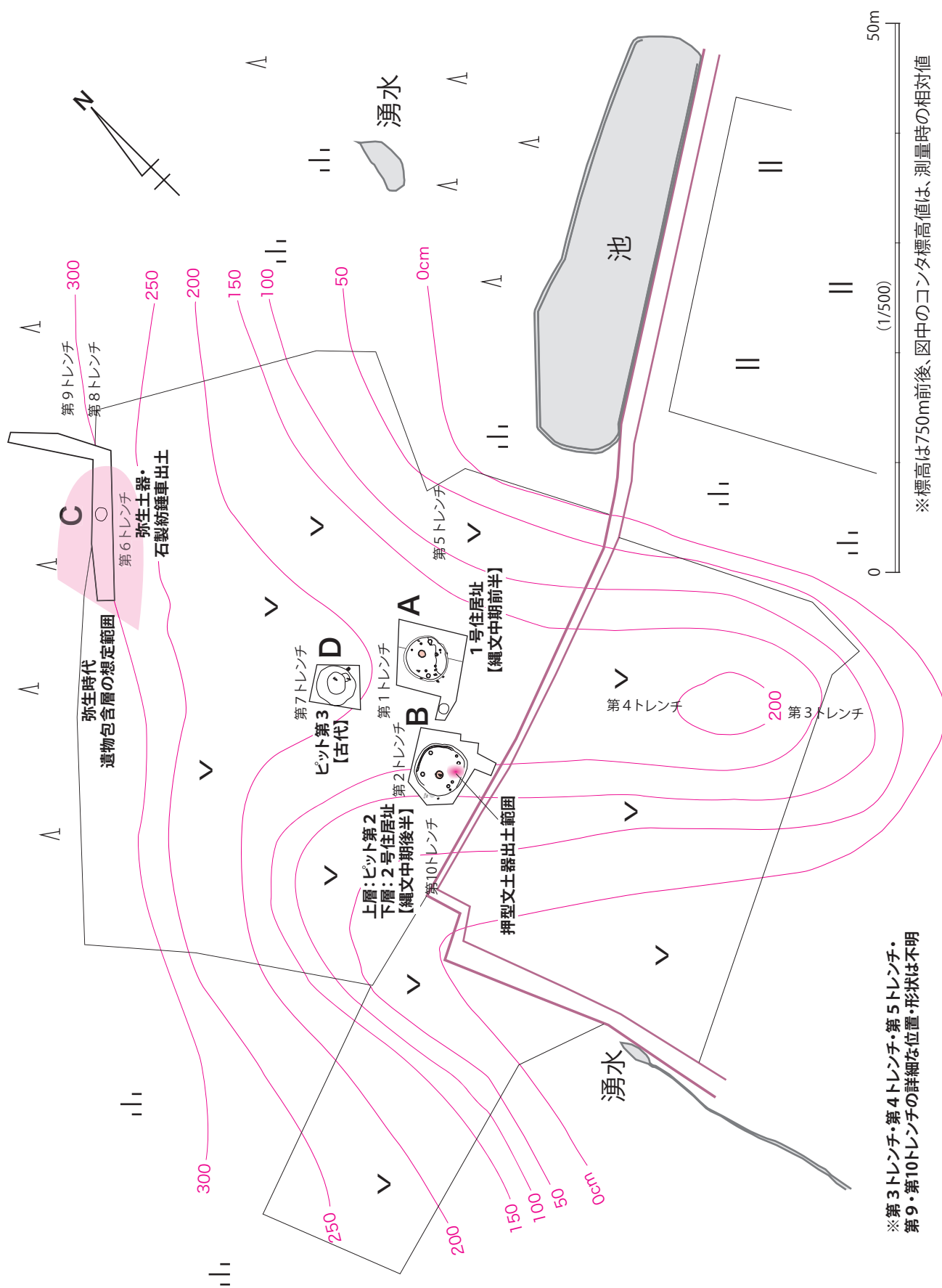


図3 大根平遺跡全体図（岡田・沢田・鈴木・村松・夏目 1967、村松ほか 1997、『大根平遺跡発掘日誌』をもとに作成）

大根平  
1号住居址

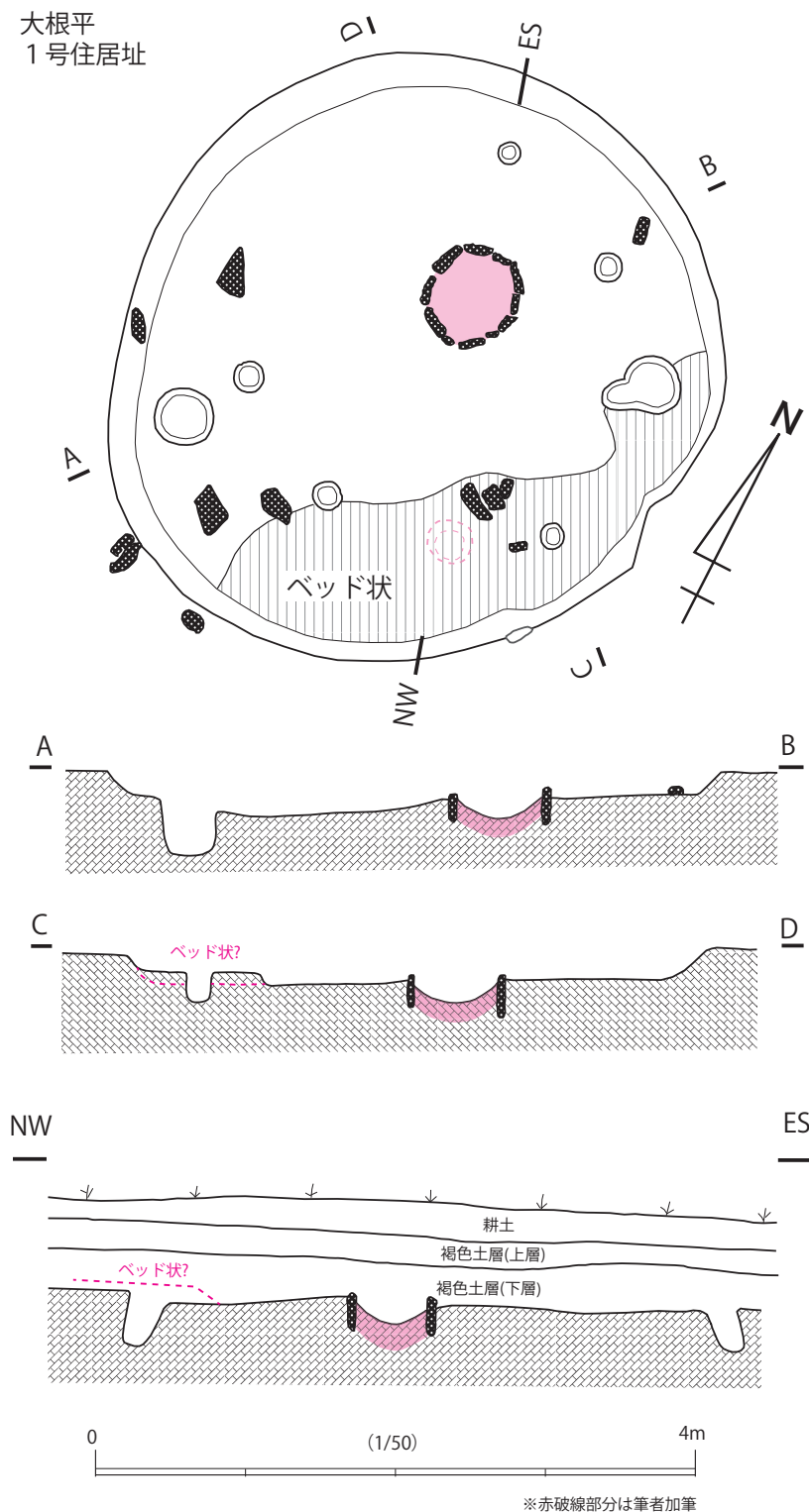


図4 大根平遺跡 竪穴建物跡1

80cmのレベルでの出土とあるので、褐色土層中であつたと考えられる。赤土層の面で、径1mほどの円形の落ち込みが確認された。埋土は黒色土で、深さ60cmほどであつたとされるが、底面まで達すると湧水が認められたという。井戸ではないかと推定された。

第6トレンチでは遺構内からの遺物出土は確認されなかったものの、第1トレンチや第2トレンチで確認された、水神平式を主体とする弥生時代前期の条痕文土器ではなく、中期・後期の甕・壺の出土が主体であつた。出土遺物の中で特筆すべきものを図6に提示した。1は弥生時代中期の条痕系壺の頸部片である。この断面に、種実圧痕が存在していることは、以前から知られていた。今回、この圧痕について、レプリカ法による観察を行った。その結果、表面の網目状構造の交点に乳頭状突起が認められ、モミであることが、改めて確認された。圧痕は胎土中に完全に入っていたもので、破断面となっていたため、肉眼で直接観察できる状態となっていた。先端部が底部側、茎部が口縁部側を向いていたと考えられ、状況から製作時に意図的に入れられた可能性が高いのではないかと考えられる。2は石製紡錘車である。設楽町内では、川向地区の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡でも石製紡錘車2点が竪穴建物跡内から出土している。これら3点は法量が近く、石材も砂質



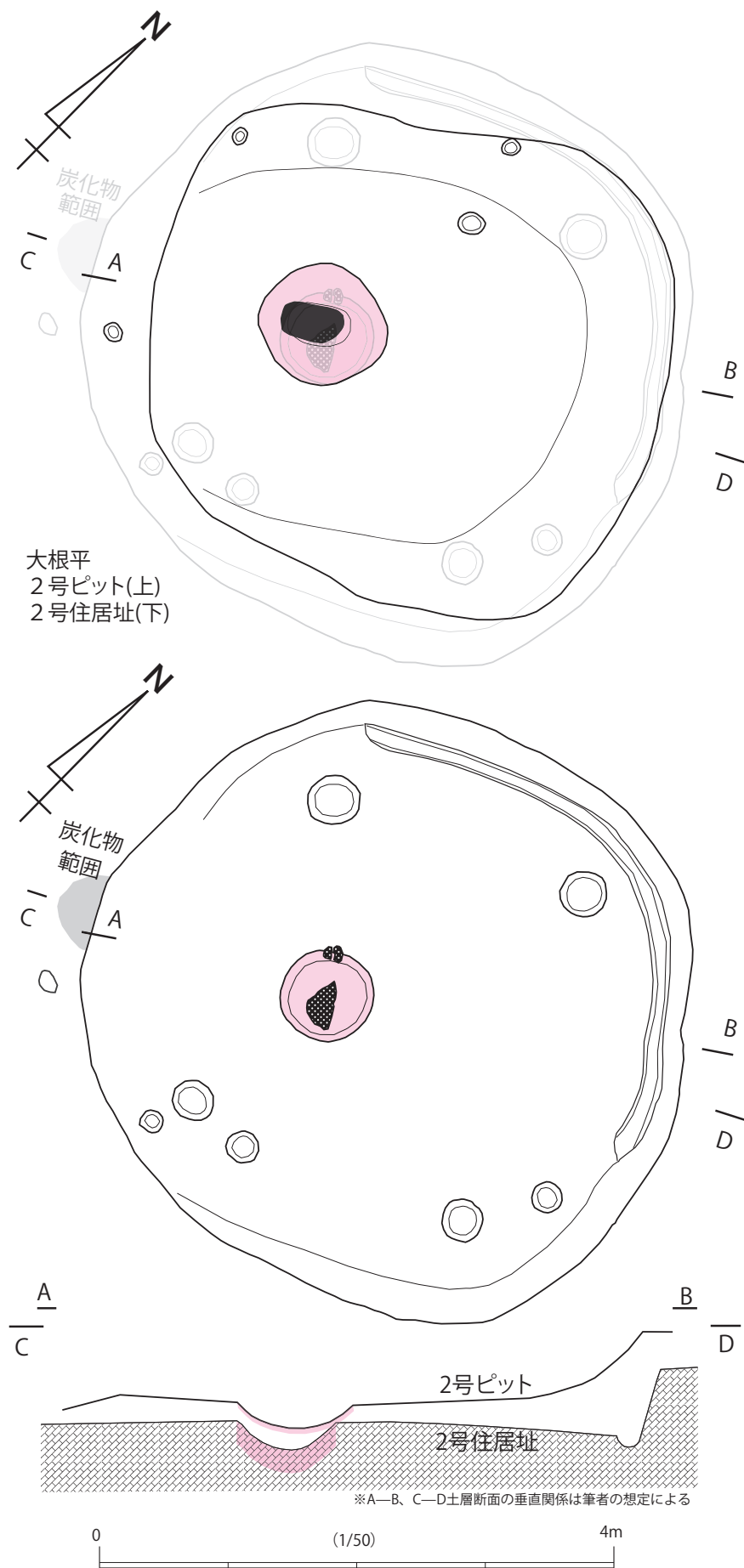


図5 大根平遺跡 竪穴建物跡2

凝灰岩と類似点が多い。

**D区** 第7トレンチによって陶器片がまとまって出土した場所である。掘削前のボーリングステッキの調査で、褐色土層の落ち込みの存在が把握されていたことによる。掘削の結果、径3.6m・深さ40cmの掘り鉢状となり、5号ピットと名付けられた。遺構底面で陶器片がまとまって出土したという。陶器片は灰釉陶器碗などを主体とし、鉄鏃の出土も1点確認されている(図7)。この落ち込みには炉跡や柱穴跡は確認されていないものの、作業施設などの建物跡であった可能性は、十分に考えられる。

なお、舌状地形の先端側に設定された第3・第4トレンチや、その落ち際に設定された第5・第10トレンチからは、顕著な遺構・遺物の出土は確認できなかったという。

発掘調査期間は1週間ほどであったが、上記のように数多くの成果が明らかとなった。調査後、ほどなくして遺跡の整備・活用に向けて、行政的な手続きが行われた。昭和29(1954)年9月に、県文化財保護委員会から、名古屋大学文学部の澄田正一らが来跡し、史跡とし

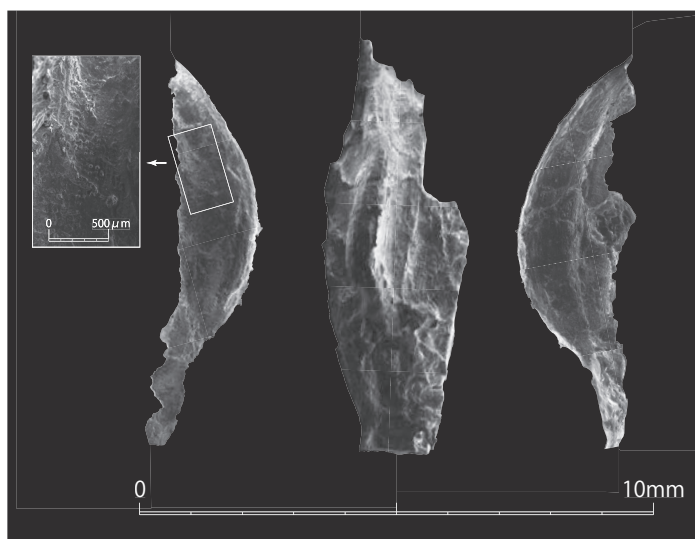
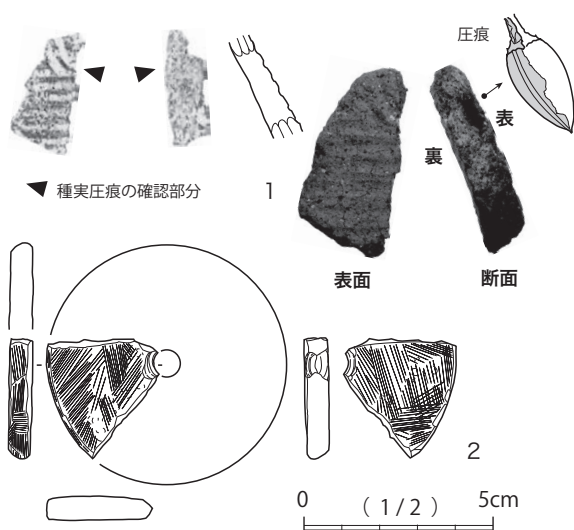
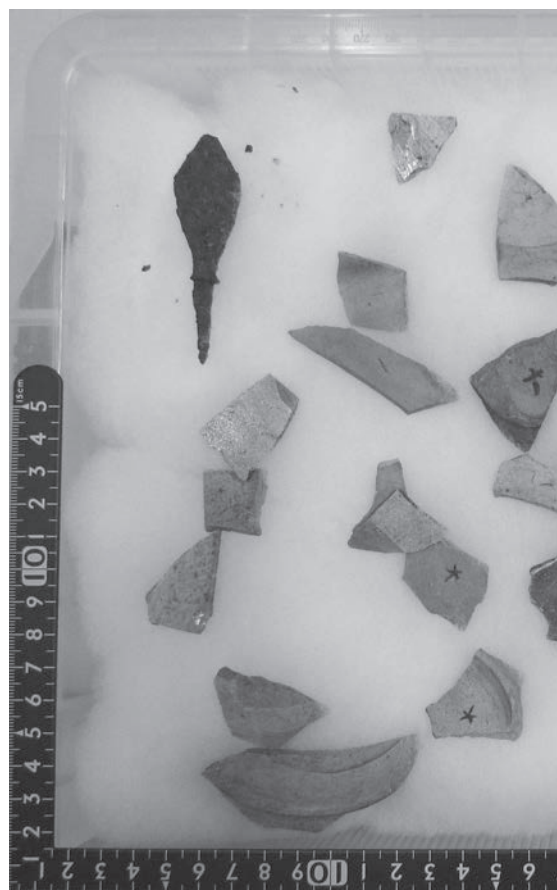
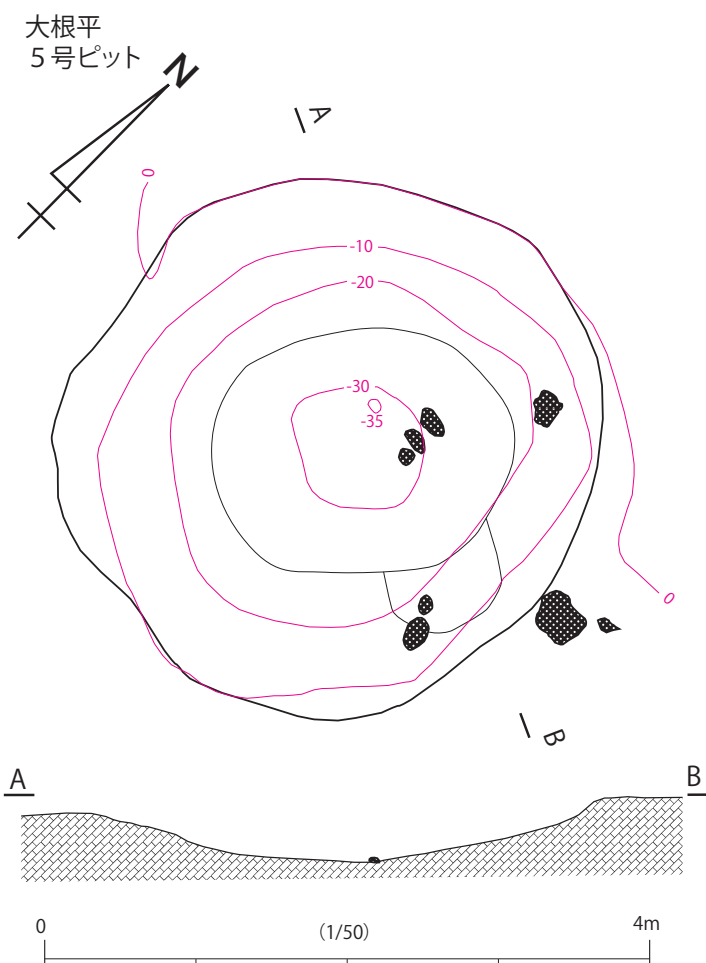


図6 大根平遺跡 出土遺物（弥生時代） 右の SEM 写真は名古屋大学微細構造解析プラットフォームの支援による



5号ピット出土遺物

図7 大根平遺跡 竪穴建物跡4





写真1 大根平遺跡 遠景（北よりか）



写真2 大根平遺跡 1号住居址 礫出土状況（東より）

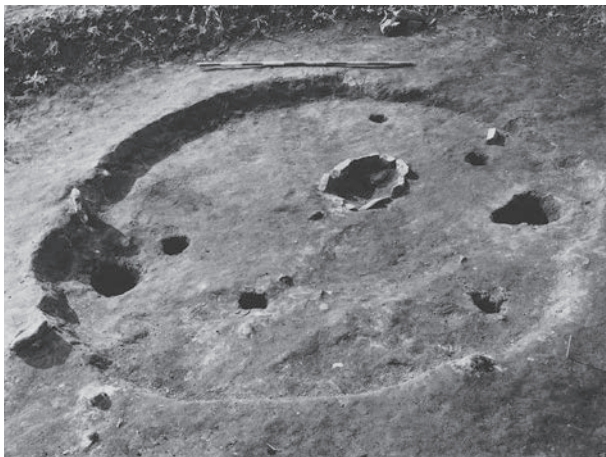


写真3 大根平遺跡 1号住居址（南東より）



写真4 大根平遺跡  
2号ピットから2号住居址への掘り下げ



写真5 大根平遺跡 2号住居址（南西より）



写真6 大根平遺跡 5号ピット（南東より）

での整備・保存の指導があった。これを受けて、同年12月に1号住居址と2号住居址の舗装による保存が行われた。そして、昭和30（1955）年の6月6日には、4,115.7㎡を対象として、県史跡に指定されたのである。

#### 4. 鞍船遺跡

遺跡調査の経過に関しては、大根平遺跡同様に『北設楽郡史』（岡田・沢田・鈴木・村松・夏目 1967）と『津具村誌 I 資料編』（村松ほか 1997）に詳しい。特に後者には、「津具高原鞍船遺跡」の一部記載のほか、調査後に夏目一平から愛知県へ提出された「埋蔵文化財発掘経過に関する報告書」（「以下、鞍船発掘経過報告書」）の内容が転載されている。また、現在、設楽町には夏目一平が保管していた「鞍船遺跡発掘日誌」（以下、「鞍船発掘日誌」）や焼き付け写真もわずかに残されている。「鞍船発掘日誌」は設楽町に三冊残されており、一冊は昭和 29（1954）年 11 月から昭和 30（1955）年 7 月までのもので、あと二冊は昭和 30 年 5 月分の原本と写しである。原本とは各担当者の直筆で、写しとしたのは同一内容を夏目によって書き写されたものである。

鞍船遺跡は、津具字鞍船に所在する。当地は津具川に注ぐ油戸川の東岸、萩太郎山から伸びる丘陵末端に位置しており、標高 715m を測る。天文 10（1541）年に開山した白鳥山金龍寺の北東奥に位置しており、津具盆地から比較的近

い位置といえる。

本遺跡は大正時代に夏目一平によって発見されるなど、古くから知られていた遺跡である。夏目は部分的に発掘した成果も含めて、詳細な報告を行っている（夏目 1923）。A 地点とした調査区の層序を以下のように記している。

地表より深さ約一尺五寸迄は石器・石器破片・石材・土器破片等多少出で、それより約五寸の間に最も多くの土器残片を見、深さ二尺以下に至りて漸次減少し、三尺五寸にて基盤に達せり。

この A 地点は、後の発掘区北側傾斜部あるいは低位部に当たると考えられる（図 8 下）。基盤層までの約 1m の間に、15cm ほどの厚さの濃厚な遺物包含層が存在していたことが記されている。この報告では、出土土器が薄手式が主体であること、石器や石製垂飾などの遺物も多いことなどが記されていた。

夏目は、大根平遺跡の調査を受けて、鞍船遺跡の学術調査ができないかと、考えていたようである。そこで昭和 29（1954）年 12 月に発掘調査が開始された訳であるが、上津具町職員、津具中学校職員ならびに生徒が多数参加していた。調査に関わった主要メンバーは、以下の通りである。

表 2 鞍船遺跡 調査内容と参加者一覧

年月日	氏名	夏目一平	久永春男	村松信二郎	岡田松三郎	鈴木富美夫	澤田久夫	松島透	塚田光	調査内容・調査遺構など
昭和 29 年 11 月		+	+	+	+	+	+			1 号地（以前の調査区：A 地点のことか）・2 号地調査（今回の調査トレンチ、ボーリング調査、掘削調査、住居址 1 号の確認）
昭和 29 年 12 月 9 日（木）		+	+	?	+	+				住居址 1 号・第 2 トレンチ
昭和 29 年 12 月 10 日（金）		+	+	+	+	+				住居址 1 号・第 2 トレンチ
昭和 29 年 12 月 11 日（土）		+	+	+	+	+				住居址 1 号・住居址 2 号
昭和 29 年 12 月 12 日（日）		+	+	+	+	+				住居址 1 号・住居址 2 号
昭和 29 年 12 月 13 日（月）		+	+	+	+	+				住居址 1 号・住居址 2 号・住居址 3 号（第 4 トレンチ）
昭和 30 年 5 月 6 日（金）		+		+						前回調査区東側と西側にボーリング調査
昭和 30 年 5 月 8 日（日）		+	+	+	+	+		+	+	ボーリング調査結果で設定されたトレンチ調査、発掘区全域の地形測量、トレンチ 4 で住居址 4 号・5 号を確認
昭和 30 年 5 月 9 日（月）		+	+	+	+	+		+	+	住居址 4 号・住居址 5 号
昭和 30 年 5 月 10 日（火）		+	+	+	+	+		?	+	住居址 1 号・住居址 3 号・住居址 4 号・住居址 5 号
昭和 30 年 5 月 11 日（水）		+	+	+		+		?	+	住居址 1 号・住居址 3 号・住居址 4 号・住居址 5 号
昭和 30 年 5 月 12 日（木）		+	+	+	+	+		?	+	住居址 1 号・住居址 3 号・住居址 4 号・住居址 5 号
昭和 30 年 7 月 13 日（水）		+	+	+						住居址 1 号周辺・住居址 2 号周辺・住居址 4 号周辺
昭和 30 年 7 月 14 日（木）		+	+	+	+					住居址 1 号・住居址 3 号・住居址 4 号・住居址 5 号の写真、測量、住居址 6 号
昭和 30 年 7 月 15 日（金）		+	+	+						住居址 6 号

※昭和 29 年 12 月 13 日実施の第 4 トレンチと、昭和 30 年 5 月 6 日実施のトレンチ 4 は別区である。



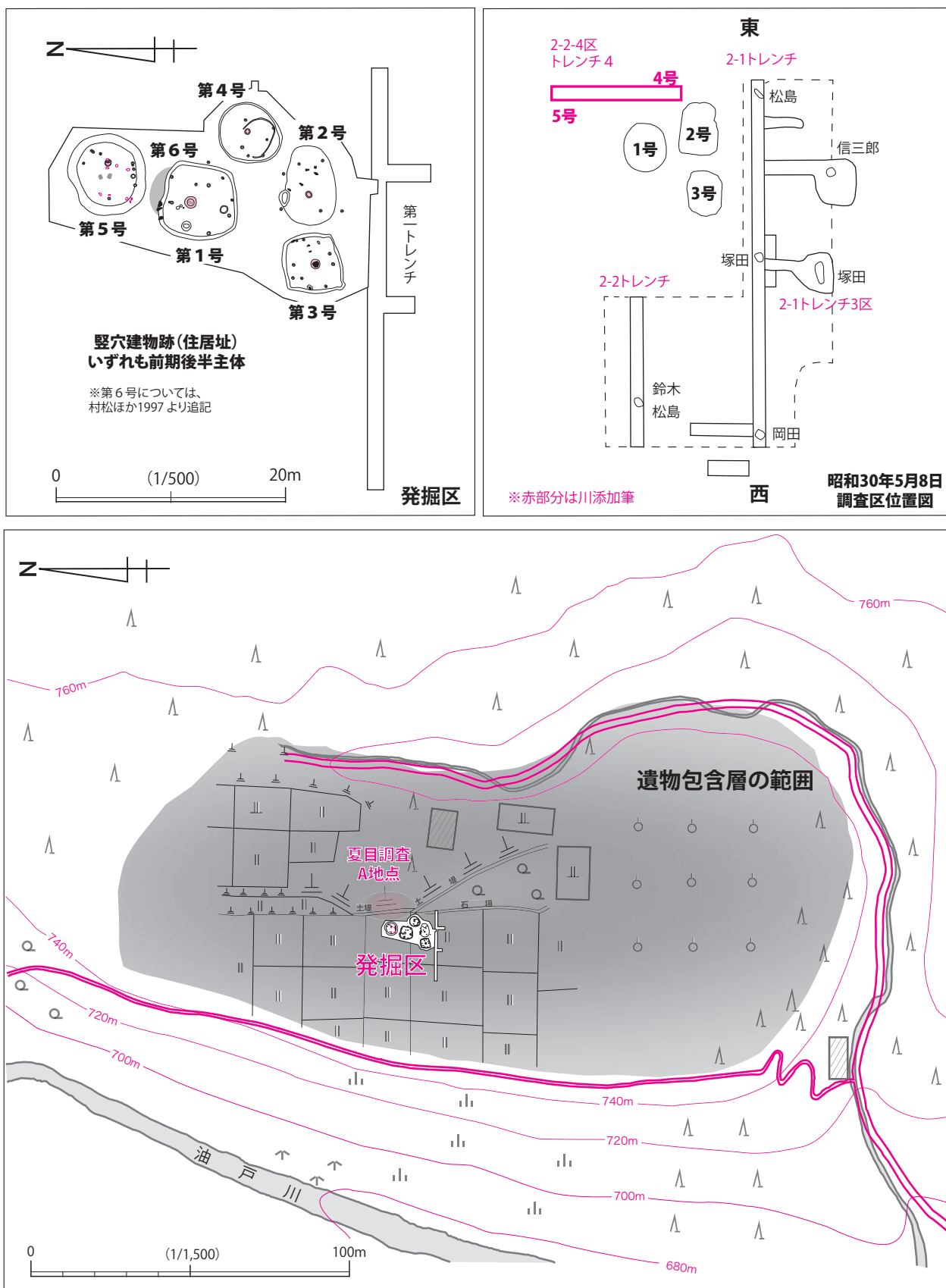
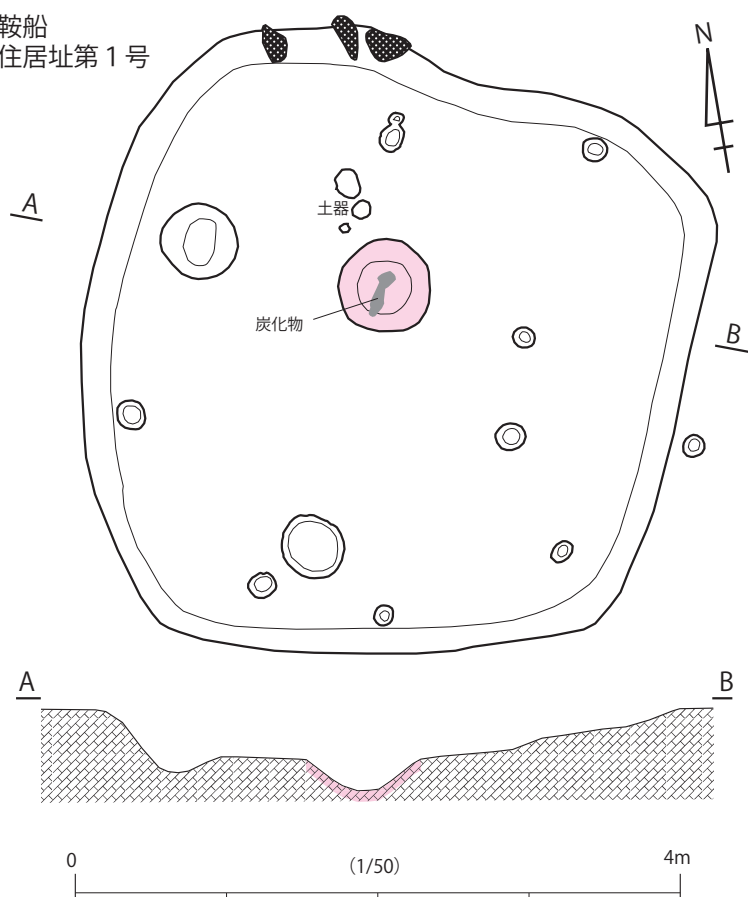


図8 鞍船遺跡 全体図および調査区位置図(「鞍船発掘経過報告書」・「鞍船発掘日誌」・夏目 1923より作成)

鞍船  
住居址第1号



夏目一平【責任者】  
久永春男【調査主任指導】  
村松信三郎・岡田松三郎  
鈴木富美夫・沢田久夫  
松島 透・塚田 光

この当時も、松島 透は明治大学学生、さらに同大学同級生であった塚田 光も調査に加わった（神村 1981）。塚田は縄文前期の住居址を調査したいということから鞍船遺跡の調査に参加することになり、これが塚田の卒業論文のテーマになったという（神村 2012）。これを裏付ける内容が「鞍船調査日誌」に記されていた。塚田が卒業論文に使用するために、住居址地図・土器拓本・石器測図の使用を、久永から了解を得たとのことで、夏目も了解した旨の記載が、記されているのである。

表 2 は各人の参加と調査内容をまとめた。調査は昭和 29 年 12 月期と、昭和 30 年 5 月期、

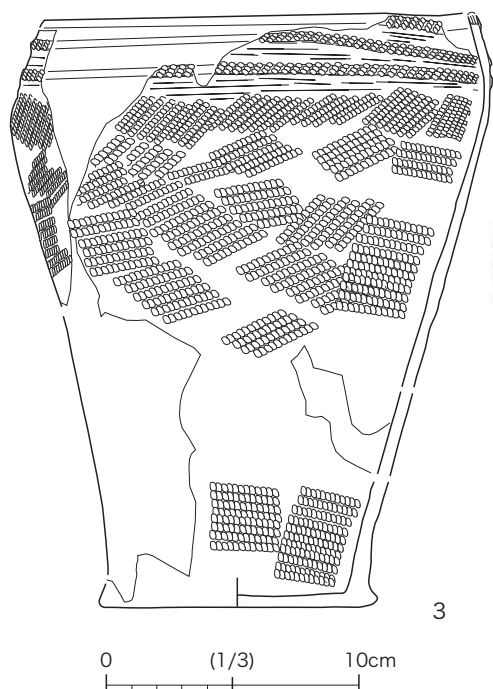
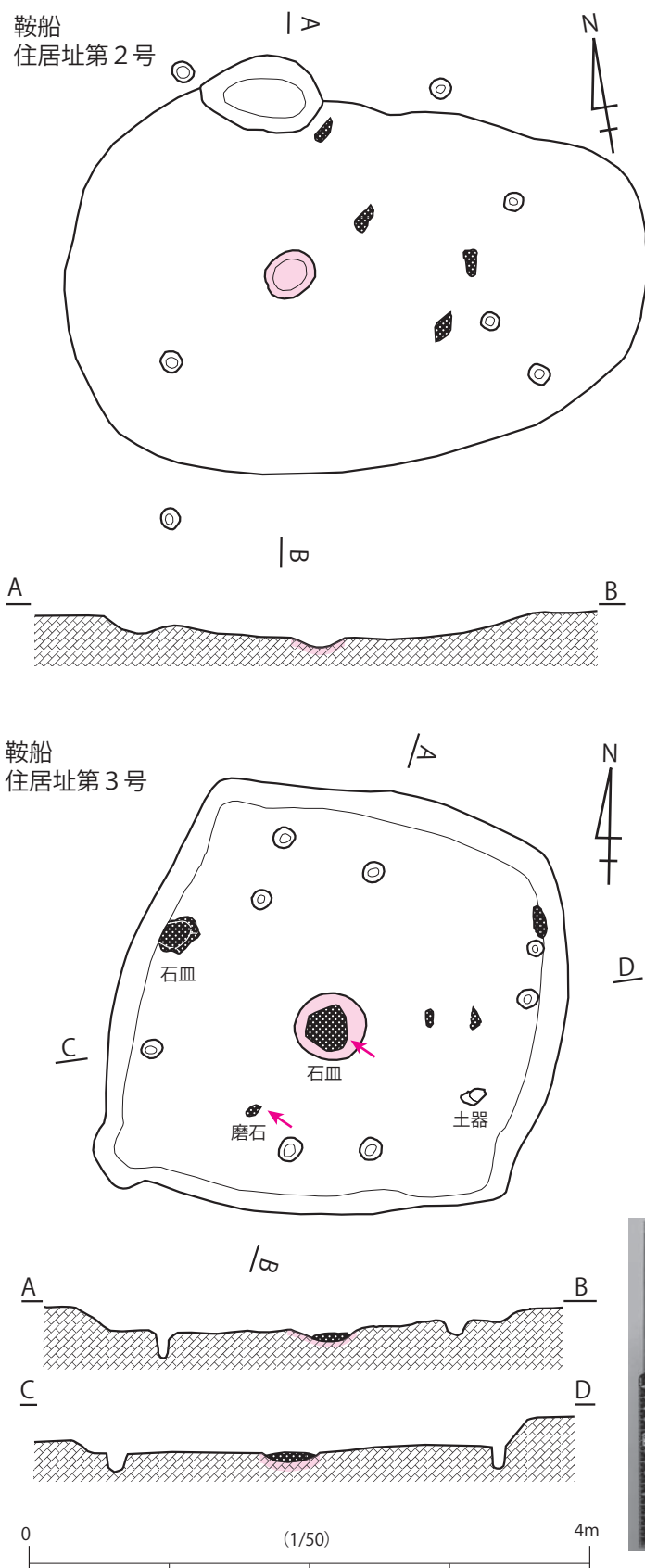


図 9 鞍船遺跡 竪穴建物跡 1





および7月期の三期に区分される。全時期を通じて調査に関わったのは夏目・久永・村松・岡田であった。鞍船遺跡では、大根平遺跡ほど、担当の追跡が厳密にはできなかったものの、鈴木が住居址2号を、村松と塚田が住居址4号を、岡田と鈴木が住居址5号を、おおよそ担当していたと思われる。以下、調査の経過と内容について、まとめておく。

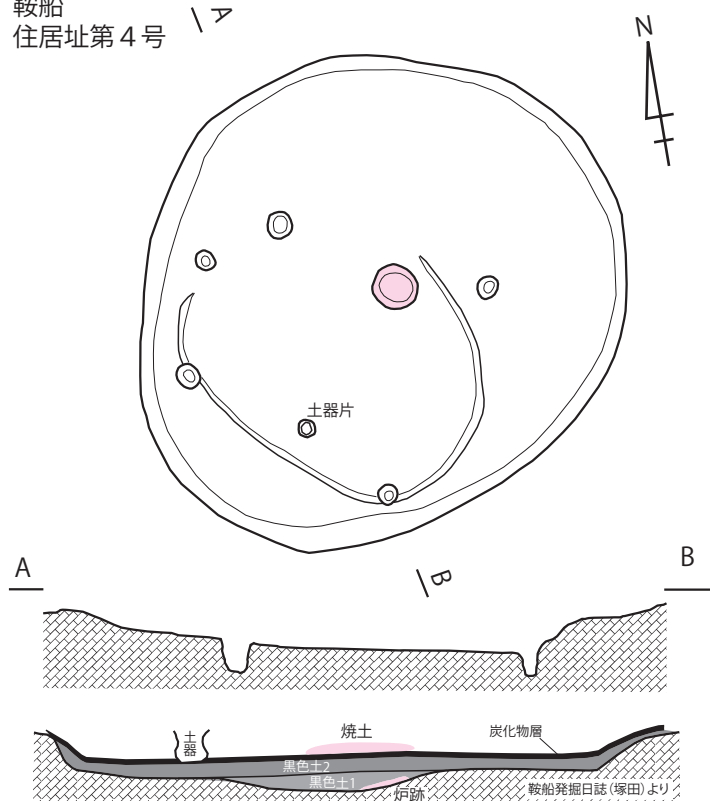
①昭和29年12月期 11月のボーリングステックによる予備調査などで、調査トレンチを設定し、住居址第1号・第2号・第3号を確認した。

**住居址第1号** 長軸4.2m・短軸4.0cmの隅丸方形プランで、深さは20cmを測る(図9上)。中央北よりに径60cmの地床炉跡が見つかった。床面レベルとみると、西側は箱掘り状に、東側は掘鉢状を呈しており、東側と南側では径50cmほどのやや大きな柱穴跡が見つかった。床面付近の炉跡北脇には、土器の出土が記録されており、恐らく図9の3が横倒しの状態で見つかったと考えられる。3は器高23.6cm・口縁径17.2cm、口縁部が緩く屈曲し底部端がやや外に張り出す小振りの深鉢である。口縁部に横方向の三条の細い隆帯(凸帯)を巡らせ、凸帯上および胴部外面全体に縄文LRが施されている。前期後半の大麦田Ⅱ式あるいは北白川下層Ⅱc式に比定されるもので、本遺構の帰属時期と考えられる。



図10 鞍船遺跡 竪穴建物跡2(右写真は住居址第3号 炉跡内出土石皿と床面出土磨石 図中赤矢印で出土)

鞍船  
住居址第4号



鞍船  
住居址第5号

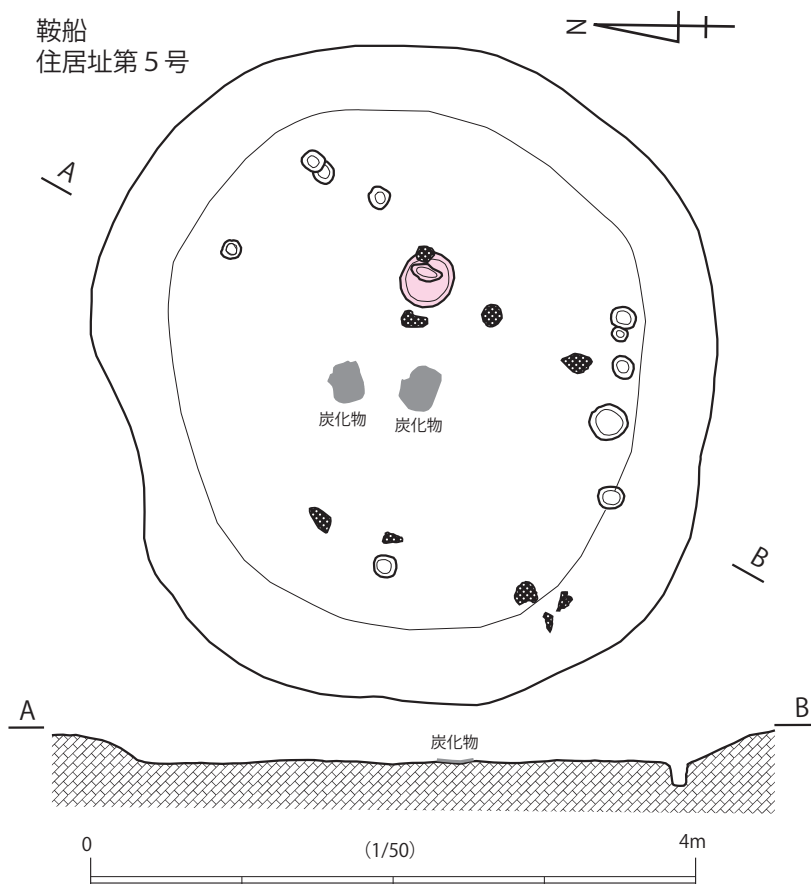


図 11 鞍船遺跡 竪穴建物跡 3

**住居址第2号** 長軸 4.2m・短軸 2.8m、深さは最大 20cm を測る、長楕円形を呈するプランである (図 10 上)。床面には中央やや西寄りに長軸 40cm・短軸 30cm の地床炉跡が見つかった。大きな柱穴跡は未検出で、径 20cm 程度の多数の小柱穴で上屋を支える構造であったと考えられる。平面プランが不安定な形状となっているが、本来は一辺 4m 程度の隅丸方形プランであった可能性が考えられる。時期は前期後半に属するとされる。

**住居址第3号** 長軸 3.2m・短軸 3.1cm、深さ最大 20cm を測る、隅丸方形プランを呈する。床面中央に径 50cm の地床炉跡が見つかり、西壁には石皿、床面には磨石や大型土器片が出土した記録が認められる。炉内にも石皿が据えられていたが、炉の機能終了後に置かれたものと考えられる。時期は前期後半に属するとされる。

②昭和 30 年 5 月期 調査当初は、竪穴建物跡が見つかった南側と東側にいくつもトレンチを入れて、建物跡の広がりを探っていた (図 8 左上)。ところが、土坑は検出されるものの、建物跡は検出されることはなかった。塚田は自身が担当した長楕円形の土坑 (長軸 145cm・短軸 55cm) について、墓壇ではないかとも考えていたようである。その後、住居址第 1 号と第 2 号の北側にトレンチ 4 を設定して掘削したところ、新たに住居址第 4 号と第 5 号の 2 棟が検出された。

**住居址第4号** 長軸 3.4m・短軸 3.2m、深さ 30cm で、不

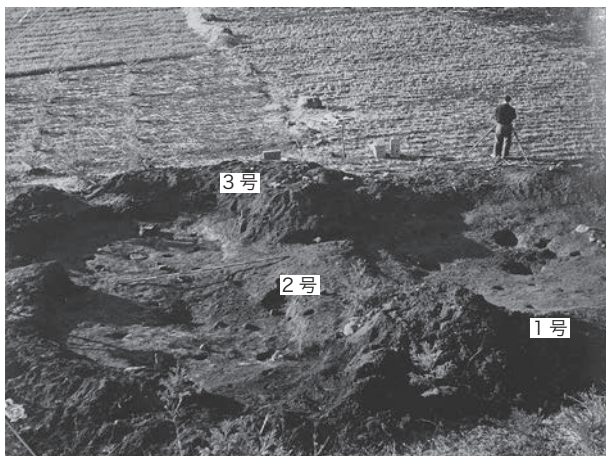


写真7 鞍船遺跡 住居址1号・2号・3号（東より）



写真8 鞍船遺跡 住居址3号（東より）



写真9 鞍船遺跡 住居址4号（南より）



写真10 鞍船遺跡 住居址5号（北東より）

整形な円形を呈する（図11上）。中央には径30cmの地床炉跡が見つかった。大きな柱穴は見つかっておらず、多数の小柱穴で上屋を支える構造であったと考えられる。中央より南側には一段大きな落ち込みが検出されている。竪穴建物跡の重複あるいは床面更新による同一掘り方内での利用が考えられるが、塚田が残した調査所見によると、複数段階の床面更新が想定される。時期は前期後半に属するとされる。

**住居址第5号** 長軸4.3m・短軸4.1m・深さ30cmで、不定形ながらも隅丸方形状を呈する。中央より西側によった位置に径30cmほどの地床炉跡が検出されており、中央には炭化物の集中箇所が2箇所見つかっている。大きな柱穴は未検出で、下場際に沿って小柱穴列が巡るように見える。時期は前期後半に属する。

③昭和30年7月期 写真・図化記録のための補足調査が実施されたが、その際に住居址1

号に重複する形で住居址第6号が見つかった。調査期間の関係上、完掘ができなかったとされている。

建物跡のうち3棟を、整備のため昭和30（1955）年9月に舗装による保存がなされることとなった。同年11月には、明治大学の後藤守一・久永春男が来跡し、第1号住居址に復元家屋の建設を行うことの提言を受けた。村では後藤守一の設計に基づき準備を進め、昭和32（1957）年8月に完成した。

なお、本遺跡も、大根平遺跡同様に、昭和31（1956）年の5月18日に、4,000㎡を対象として、県史跡に指定された。

## 5. 大根平遺跡・鞍船遺跡調査の意義

この両遺跡の発掘調査の実施の背景には、昭和26（1956）年から昭和45（1970）年まで



続いた、『北設楽郡史』編纂事業がある。郡史編纂委員会やその関連では、遺跡の分布調査のみならず、以下のような発掘調査などが実施された。

昭和 27・28 年 津具地区での中世木器発見

昭和 28 年・昭和 30 年 東栄町桜平遺跡で土器  
棺墓・平地式住居の発見、調査

昭和 29 年 東栄町西向遺跡発掘調査

昭和 33 年 東栄町ブヤキ窯跡発掘調査

昭和 33 年・34 年 設楽町杉平遺跡発掘調査

昭和 36 年 豊根村宮嶋遺跡発掘調査

昭和 36・38 年 豊根村茶臼山遺跡発掘調査

昭和 37 年 稲武町大安寺遺跡発掘調査

昭和 38 年 設楽町市場口遺跡発掘調査

昭和 41 年 屋木下古墳の発掘調査

このことから分かるように、大根平遺跡・鞍船遺跡の調査は、郡史編纂委員会による本格的な発掘調査の契機となったといえる。また、この調査は、自治体が主体である上で、かつ久永春男が調査主任を務める調査としても、初めてのものとなった。その後、久永らは愛知県内の各遺跡調査を広く行っていく訳であるが、その初期の頃の業績となったのである。

加えて、県指定史跡への登録も早く、一部を保存・復元するという在り方も、遺跡の整備・活用への視点を、早くから実践された事例として注目されよう<sup>(1)</sup>。

#### 参考文献

- 岡田松三郎・沢田久夫・鈴木富美夫・村松信三郎・夏目一平 1967 『北設楽郡史 原始～中世』 北設楽郡史編纂委員会  
神村 透 1981 「塚田さんの中期縄文時代研究について」『貝塚』28. 5～7 頁 物質文化研究会  
神村 透 2012 「学友 塚田光さん マコ・ミクロリス・考古学手帖 田舎考古学人回想誌 25」『アルカ通信』105. 1 頁  
考古学研究所（株）アルカ  
神村 透 2013 「研究所・研究会・講演と積極的に顔を出す 田舎考古学人回想誌 30」『アルカ通信』115. 1 頁 考古学研究所（株）アルカ  
夏目一平 1923 「三河国北設楽郡上津具村鞍船遺跡石器時代遺跡報告」『考古学雑誌』14-1. 48～54 頁 考古学会  
村松信三郎ほか 1997 『津具村誌 I 資料編』 津具村

考古学的側面から述べるならば、両遺跡とも、現在公開されている記録以上に、周辺にトレンチによる調査が実施されていたようで、建物跡や遺物出土が濃厚であった場所の調査地点のみが主に公開されているように見受けられる。特に、鞍船遺跡に関しては、建物跡が集中する居住エリアと捨て場、広場そして墓域が存在している可能性もあり、集落構造を考える上で重要な遺跡になることが期待される。また、両遺跡の堅穴建物跡について、同一掘り方内に、床面の更新をする複数面の利用事例が多いことが分かる。縄文時代の堅穴建物跡に関してはしばしば確認される事例であり、当時のヒトたちは、土地の反復利用の際に意図的に行っていた可能性が高い。

今回、調査記録などに基づいて、今日的検討を行ったが、出土遺物の整理が行われなければ、最終的な遺跡の評価を行うことはできない。今後、大根平遺跡および鞍船遺跡の正式な発掘調査報告書に向けた、整理調査が進むことを期待したいところである。

本稿を草するに際し、以下の方々からのご教示・ご配慮を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

加藤紘市・高橋三郎・平井義敏・渡邊俊也

愛知県県民文化部文化部文化芸術課文化財室・設楽町教育委員会・設楽町奥三河郷土館・名古屋大学微細構造解析プラットフォーム

(1) そのこともあってか、北設楽郡内では、大根平遺跡が「愛知県史跡第1号」、鞍船遺跡が「愛知県史跡第2号」、と称されている。しかし、実際には愛知県側としてはそのような記録はないという。